INFORMATION

事務局にインターンが参加



今年度、事務局のスタッフとして、インターン2名、来馬司さん、辻牧子さんが参加することになりました。

立命館大学の学生である二人は、應典院でのさまざまな活動に興味をもって、ぜひ関わりをもちたいと熱望。その熱意に感銘を受け、倶楽部の事務局スタッフとして、関わってもらうことになりました。

週数日の勤務ですが、事務局の日常業務はもちろん、事業にもさまざまな形で参画します。

どうぞよろしくお願いいたします。

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第11回 7月19日(木)

「ホトケと癒し・仏教看護に何が可能か」

話題提供者

浄土宗済鎮寺住職・神戸医師会看護専門学校講師 明石和成さん

◎時　間:午後6時30分～

◎参加費:500円

◎会　場:應典院

お申し込みは事務局まで。

交流事業 ビールdeお盆

今年度最初の交流事業、恒例のビールdeお盆は、8月2日(木)に開催します。

今年は、少し趣向を変え、應典院に集合、法要後、会場を移動しての開催となります。

会員交流の絶好の機会です。これからの倶楽部を語り合う場として、多くの会員のみなさんのご参加をお願いします。

◎日　時:8月2日(木)
18:30應典院集合

※詳細については、事務局までお問い合せください。

※一般の方も参加歓迎です。

※会場予約の都合上、参加希望の方は、必ず事前に事務局までお申し込みください。

パフォーミングアーツ・メッセ2001in大阪

「パフォーミングアーツ・メッセ2001in大阪」は、芸能・芸術活動を行う団体を始め、劇場・ホールなどが一堂に会する催し。音楽や民俗芸能などの公演も見ることのできる芸能・芸術の祭典です。

昨年に続き、應典院が参加。多くの方々に應典院を知っていただく、絶好の機会となりそうです。

運営委員の西島宏さんが、メッセの事務局を担当していらっしゃる関係で、今回チラシとチケットを同封させていただきました。ぜひ、会員のみなさんもご参加ください。

○7月31日(火)・8月1日(水)

○大阪国際会議場

お詫び

総会のご案内に同封させていただきました、7月4日の寺子屋トークは、講師の方の都合により、急遽延期となりました。

また日を改め、ご案内いたしますので、どうぞご了解いただきますようお願いいたします。

【新入会員ご紹介】

(2001年6月20日まで)

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】

坪田　直美　大阪市平野区

中村　幸彦　大阪市天王寺区

【兵庫県】

宝塚NPOセンター　宝塚市

サリュ VOL. 26
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2001年6月30日
(偶数月発行)

編集人　池野亮、大塚郁子
川井田祥子

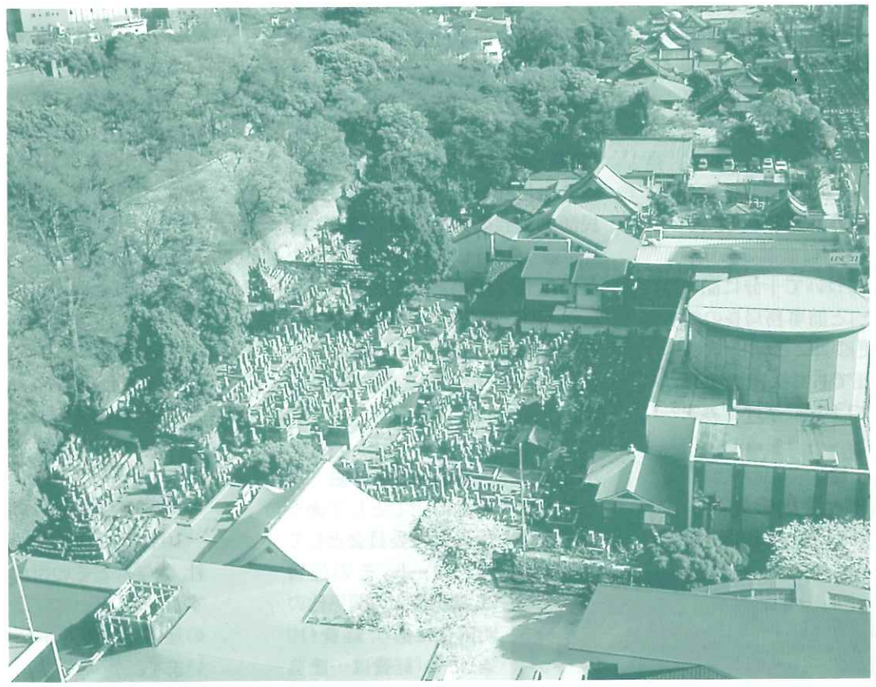
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

2001 JUNE
vol.26



「お見合い」をテーマにした写真展を見た。みずからメーク、衣装を変えて撮ったお見合い写真30点を一挙に展示。あきらかによそいきの顔と衣装がならぶ。一生を決めるかもしれない大切な一枚につまった精一杯の演出。そんなお見合い写真の中の姿は、ふとわたしたちの生活とだぶって見える。ずーっと着飾った「わたし」で生きてゆくのは疲れてしまうと感じるのだけれど……。ふだんのあなたはどうですか?

第5期総会報告

今、新たな一歩を歩み出す

應典院寺町倶楽部がスタートして丸4年、社会に存在感あるユニークなNPOとして着実に地歩を固めてきました。
このたび第5期の総会を6月27日に開催、1年間理事会で議論されてきた結果を踏まえ、いっそうリアリティあるNPOとなるため会則の改訂をはじめ大幅な改組を行いました。寺町倶楽部の新しい船出に、ぜひあなたもご参加ください！

倶楽部の改革、2つのポイント

このたびの應典院寺町倶楽部の改組で最大の眼目は、3年間の実績に基づいた活動方針の見直し。また、それに伴う会則改訂、役員人事の刷新という、大きな改革がありました。

「昨年の総会以来、理事会の大きな議論の的がこの案件でした。3年間の蓄積をもとに、倶楽部のありかたや活動方針について十分に話し合ってきました」と前事務局長の池野亮。会則変更は会にとって、大きな方向性の修正でもあり、その改訂のポイントを2つ下記に挙げてみました。

●

ポイント1・目的と活動の見直し

このたび会の目的（会則3条）を改訂、現行会則に「非営利市民活動の基盤づくりと活性化を促し、コミュニティの健全育成を図り、創造性ゆたかな地域社会の発展に寄与する」ことを盛り込みました。これまで会員相互の交流という「共益」の目的から、広く市民を対象として「公益」が意味づけられました。

それに伴い、活動（4条）でも、市民活動や芸術文化活動の基盤づくりが盛り込まれ、人材育成や教育なども重要な活動として加えられました。現在の倶楽部の主催事業である「コモンズフェスタ」「舞台芸術祭」もその一環として取り組まれます。



ポイント2・役員組織の改組

これまで運営の中心としてあった理事会を改め運営委員会として再スタート。その趣旨は、應典院との関係性の明確化にあり、経費（10条）にも「経費は…應典院より適宜支援を受ける」と明記されて、その経営的な関係をクリアにしました。

その改訂により、役員構成が変更となって、会長に應典院総代の扇谷順介さん、運営委員長に榛木恵子さんが就任されました（5ページの役員人事一覧をご参照ください）。

●

この應典院総代の会長就任については、「NPOをお寺に所属させるというのが本意ではありません。あくまで倶楽部の経営責任の所在を明確にしたわけであって、お寺とNPOの協力関係をいっそう具体的に打ち出していければいいですね」と、應典院住職の秋田光彦。いい意味でお互いが支えあう関係を目指していきたいものです。

新任の会長、扇谷順介さんは、気さくで人望厚く、あたたかく会をリードしていただけることでしょう。

運営委員会の新しい役割

10名の新運営委員は、NPOや会社、大学などその所属はさまざまですが、新体制となって今後の倶楽部の運営の中枢を事務局とともに担います。

「私たち運営委員の使命は、倶楽部のひとつひとつの具体的な事業に責任を持って取り組むこと。これまでにない担当制を敷いて、与えられた仕事をきちんと消化していく、そういうマネジメント意識も持たなくてはなりませんね」と、運営委員のひとり蔦田夏さん。

いのちと出会う会、寺子屋トーク、コモンズフェスタなどの事業の企画から会員獲得、財源開拓まで、その担当事業は幅広いものがありますが、それぞれの才能を結集して倶楽部の原動力となっていただきます。

運営委員に就任されたばかりの、パドマ幼稚園PTA会長の中村幸彦さんからは、「職場も家庭環境もまったく違う人材どうし、相互に協力しあってできることをやろうという意欲がすばらしい。おもしろいつながりができそうですね」と語っていただきました。

新しい倶楽部の時代創生へ



これまで倶楽部の基礎を築いていただいた前理事長・田村精造さんは新たに参与に就任、また倶楽部発足以来の理事であった、北達一郎さん、川口圭子さんのおふたりは今期をもって退任されました。みなさんのご貢献を紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

このたび改組に伴い、これまでの会員構成も見直され、現行に加えて個人会員5,000円が追加、学生会員が現行3,000円から2,000円に会費改定となりました。これも、倶楽部の会員数を増数するための方策で、2001年度に現在の30％アップの50名の増員を目標としています。また、財源開拓として、助成金や寄付金対策をプロジェクト化、将来的には収益事業も検討していくこととなりました。



運営委員会とともにこれに対応する事務局には、3代目の新事務局長に秋田光彦が就任、ほか6名のスタッフがあたります。とくにインターンとして、立命館大学の4回生である来馬司、辻牧子が、若いパワーで倶楽部の事務局をリードします。前事務局長・池野には、引き続き次長として事務局運営の中心を担います。

会務全体を代表する運営委員長榛木恵子さんは、つぎのように抱負を述べられました。

「應典院は、市民活動、芸術文化活動などを通して、ますます多彩でゆたかに人々が交流する場所になるに違いありません。ここの原点はお寺。いのちをたいせつにしながら、あなたも私も生かされている、また人生をいろいろな人といっしょに作り上げていく、そういう絆づくりが私たちのだいじな仕事。これからも会員のみなさんのご参加とご支援をお願いします」。

倶楽部が、私たちの街に、暮らしに、そして人生に、新たな風を吹き込む存在となれるよう、これからもますます精進していきたいものです。

※なお詳しい会則改訂については同封の総会資料をご覧ください。



会長　扇谷順介さん

長年、楽器販売業を営む傍ら、地域活動にも熱心に取り組み、地元玉出の再開発計画の委員長も務める。現在應典院総代のおひとり。69歳。

應典院は、私どもの菩提寺大蓮寺の塔頭寺院。大蓮寺のご縁をいただき、再建以来應典院の総代を務めてまいりました。

このたび突然のご指名で、会長となりましたが、心機一転、新たに取り組んでいきたいと思います。

私の座右の銘は「手が手を洗って両手がきれい」です。いわばボランティアの心得そのものですが、倶楽部の活動もお互いがともに助け合う精神をたいせつにしてほしい。

榛木さんをはじめ運営委員のみなさん、本当に一線でご活躍の方々ばかりですが、私も及ばずながら倶楽部発展のためにがんばっていきたいと念じております。また長年理事長として本会をリードしていただいた田村さんにも心からお礼申し上げます。

どうぞ会員のみなさんの、変わらぬご支援ご協力をお願いいたします。

新体制のもと、収益性と公益性の調和のとれた活動を！

～第5期活動計画・事業～

2001年度事業の基本方針としては、トータル的に事業のあり方（再構築）を目指します。新体制のもと、自立したNPOへ向け、新たな体制づくりを目標とします。
特に、財政基盤の強化に向けて、現状を見直し、収益性と公益性の調和のとれた活動の展開を指向します。

事業目標

(1)各主催事業の充実

よりいっそうの他団体やボランティアとの協力関係を深め、人的交流を目的とした、市民文化発信のネットワーク作りを心がけます。

(2)事務局機能の活性化

具体的に事業の一翼を担ってもらえる人材の確保を目指します。

(3)運営委員(会)との連携の円滑化

事務局と運営委員(会)が連携を計り、充実した事業の展開を行います。

(4)財政基盤の強化

新会員の獲得に向けた活動はもとより、会員制度の見直し、また団体や事業に対する助成金を得られるように働きかけます。

(5)独自の収益事業の立案・実施

倶楽部の理念に沿った収益事業、特にコミュニティビジネスとして、独自の事業の立案と実施を目指します。

(6)外部モニターによる評価制度

各事業に対する個々の評価は、さまざまな方面から高い評価をいただいています。しかし、今後NPOとしての地歩を固めていくためには、通年の倶楽部をトータル的に評価する必要性があります。自己評価はもちろんですが、研究者やジャーナリスト、NPOの専門家等々の方に、客観的な視点から評価をしていただく必要性があります。その評価については、次年度の総会時に公表し、次年度以降の活動方針に反映させていきます。

事業計画

(1)セミナー事業

①寺子屋トーク

・第28回　2001年6月16日
「生き方のお手本？～自分をほどく哲学クリニック～」
講師：関西大学教授・植島啓司さん
大阪大学教授・鷲田清一さん

・第29回　2001年9月23日
「ひきこもりと家族について」
※関西こども文化協会共催企画
講師：未定

・第30回　2001年10月8日
「がんばらない」
講師：諏訪中央病院院長・鎌田實さん
ささえあい医療人権センターCOML・辻本好子さん

・第31回　2001年10月21日
「障害の受容～人それぞれの生き方」
※日本吃音臨床研究会共催企画
講師：聴覚障害の内科医・原　誠二さん
障害者自立生活問題研究所・谷口明広さん
グラフィックデザイナー・牧口一二さん(予定)

・第32回　2001年11月11日
「日本人の死に方パート3」
※教化情報センター21の会共催企画
講師：ノンフィクション作家・井上治代さん
日蓮宗妙光寺住職・小川英爾さん　他

※今年度より、聴講料は1500円(会員1000円)に改訂

(2)ネットワーク事業

①コモンズフェスタ

○期　間：2001年11月4日～11日
コモンズフェスタ2001では、アーツの多様な可能性を社会につなぐ「場」の創出を大きなテーマのひとつとしています。アーツと社会、両者の関係をもっとゆたかなものとするために、作家、鑑賞者、劇場を結びなおし、これまでにない出会いのコラボレーション(協働)を試みます。
また、①アーツ・コラボレーション・プロジェクトを新設、②大学とのコラボレーション、③モニターボランティア、④コモンズクーポン「ダーナ」の発行と、新たな4つのテーマを設け、新たな「場」の創造を目指します。

②舞台芸術祭　SPACE⊠DRAMA2002

○期　間：2002年1月下旬～2月中旬
今年の舞台芸術祭は、特に演劇に特化し、若いアーティストたちの活性化を目指します。単に公演だけを行うのではなく、参加にあたってのプレゼンテーションや専門家による評価などを通じて、自らの創造活動を見直す場を提供します。

③いのちと出会う会

(毎月第3木曜開催・8月と12月は休会、内容は予定)

・第9回　2001年5月17日
話題提供者：田辺病院看護婦・僧侶　中村敏さん

・第10回　2001年6月21日
話題提供者：関西医科大学看護部長　大蔵サチ子さん

・第11回　2001年7月19日
話題提供者：浄土宗済鱗寺住職
神戸医師会看護専門学校講師　明石和成さん

・第12回　2001年9月20日

・第13回　2001年10月18日

・第14回　2001年11月15日

※以後の予定は未定。

※10月8日の「がんばらない」、11月11日の「日本人の死に方パート3」に協力

(3)サポート事業

・市民活動サポート事業については要検討

(4)交流事業

会員同士、また誰もが自由に関われる場を、交流会として開催します。

・お盆のつどい　2001年8月2日
・年忘れ交流会　2001年12月26日

(5)出版広報事業

・偶数月上旬にサリュを刊行
・その他広報活動

(6)会議

①会員総会
6月上旬に開催します。

②運営委員会
年に3～4回開催します。但し、事業毎に運営委員が随時事務局の会議に参画します。

(7)協力事業

その他、外部団体と提携して行う協力事業があります。広報面等での協力を行います。

(8)その他

・應典院インターネットに情報提供の協力
・應典院ブックレットの販売協力
・應典院年報の配布協力

■役員人事(敬称略)

・会　長	扇谷　順介(賛助会員)		西島　　宏(一般会員)
・運営委員長	榛木　恵子(一般会員)		三木　康彰(一般会員)
・運営委員	石黒　良彦(一般会員)		森栗　茂一(一般会員)
	伊藤　伸二(一般会員)	・事務局長	秋田　光彦(賛助会員：應典院住職)
	関浦　照隆(一般会員)	・参　与	秋田　光茂(大蓮寺住職)
	蔦田　　夏(一般会員)		田村　精造(賛助会員)
	中村　幸彦(一般会員)	・監　査	志野　義治(一般会員)
	名畑　　孝(一般会員)		

CLUB TOPICS

5年目の寺町倶楽部にもぜひご協力を！会員継続をお願いします！！

総会も無事終了し、新たな体制での寺町倶楽部がいよいよスタートしました。

「非営利市民活動の基盤づくりと活性化を促し、コミュニティの健全育成を図り、創造性ゆかたな地域社会の発展に寄与する」……、新会則では倶楽部の目的をこう謳っています。

NPO、NGOに代表される市民が主体の活動が、今、活発化しています。それは、さまざまな問題を抱える現代社会の中で、先駆性、多元性、批判性、人間性のある活動を通じて、社会に新しいエネルギーを注ぎ、社会を常に柔軟で自己変革可能なものとする活動だと思います。

5年目になる今年度は、倶楽部にとって大切な年になるのではないでしょうか。新体制のもと、新しい方針を掲げて再スタートする年でもあります。

私たちが創造性ゆたかな地域社会の発展を目標に、直接的に活動を展開することはもちろんですが、NPO、NGOなどのより多くの市民活動団体とのネットワークを広げ、またその活動を支援することによって、倶楽部の目指す方向性を明確化していきたいと考えています。

寺町倶楽部の活動に、引き続きご協力をお願いします。そして、ぜひさまざまな事業にご参加ください。

倶楽部の収入は、ほぼ100％が会費収入です。この時期、全会員の約7割の方が会費の更新時期にあたります。更新がまだの方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたしますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

倶楽部の活動が、よりよい社会づくりへと将来的につながっていくためには、会員のみなさんのさまざまなかたちでの参加が大切です。

Make up Community コミュニティな人々

ゲスト：山口洋典さん



今回ご登場願ったのは、大学コンソーシアム京都（以下、コンソーシアムと略）・NPOスクール事務局次長、山口洋典さん。コンソーシアムは98年3月に設立された財団で、京都府内の大学50校が参加。大学間の連携を図り、高度で多彩な教育プログラムを提供するべく、さまざまな事業を展開しており、昨秋からは「コミュニティ・ビジネス&サービス講座」を開講、実地研修も取り入れた講座が好評を博しています。秋のコモンズでは校外ゼミを開催する予定で、今後ますます寺町倶楽部との関わりが深まっていくことでしょう。

仕事の傍ら、「地域通貨おうみ委員会」のメンバーとして活動するなど、自らも「現場で学ぶ」ことを続けておられる山口さんに、お話を伺いました。

コンソーシアムでの主な仕事は、「学生が街に出るプログラムづくり」です。街へ出れば初めて会った人に、「あなたは何をしているの？」って訊かれますよね。答えるためには自分自身を見つめ直さざるを得ず、他人を合わせ鏡にして自分を見るわけです。そうやって自分は何者か、できることは何かということを人との関わりを通して考えることが大切だと思うんですよ。

なんて偉そうなことを言ってますが、僕自身、学生時代に痛い思いをしたことがあるんです。大学3回生のとき、ボランティア活動についての研究のためにアメリカへ渡ったんですが、会いに行った研究者に「What can I do for you？」（私に何を求めてる？）って言われました。つまり、「お前のやろうとしていることは日本でもできるはずなのに、なぜここへ来たんだ？」と。そのとき初めて、与えてもらうことを期待していただけの自分に気づかされました。メチャクチャ痛い一言でしたね。

それまでの僕は、本を読んだり先生の話を聞いたりすることで得た知識を身につけ、「わかったつもり」になっていたんだと思います。頭で解釈し理解する、英語でいうと「understand（アンダースタンド）」ですが、学ぶってことはほんとうは「realize（リアライズ）」で、五感で感じリアルにする、自分の身体に体験として刻み込むことだ、と考えるようになりました。震災のときのボランティア体験も大きく影響していますが。

現場に出ればつねに自分が問われます。失敗して落ち込むこともありますが、揺らぎの幅が大きければ大きいほど、学びの度合いも大きいはずです。大学に閉じこもっているだけでなく、地域の人々との交流やNPOの活動現場に飛び込んでみる、そんな仕掛けをもっと増やしていきたいですし、應典院でも面白いことを企んでみたいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

新潟の日蓮宗・妙光寺は、山間にある風情ある古刹ですが、片や会員制による永代供養墓の先駆けとして、全国にその名を知られています。永代供養墓とは、血縁に頼らない、生前に自己決定した人たちの新形態のお墓のこと。制度や因習から脱した新たな結縁づくり（ネットワーク）をお墓を軸に取り組んでこられた、若き住職・小川英爾さんの10年以上に及ぶチャレンジがありました。

その妙光寺さんの新本堂がこの4月28日に落慶、お祝いにご随喜させていただきました。本堂の建築の見事さもさることながら、落慶式に集まった総勢400名近い参列者の、約半数が永代供養墓の会員（契約者）であることに感嘆しました。お墓が縁となって、寺、地域、檀家、会員らがつながりあうもうひとつの共同体。たとえ見知らぬ者どうしでも、終の棲家をともにする同行者どうしの清々しい関係が印象的でした。むずかしい教義やならわしを持ち出さずとも、まことにお寺らしいご縁を尊ぶ場でありました。

■引きこもり、終わらない思春期

去る6月9日、精神科医の斎藤環さんを招いて、「若者はなぜ引きこもるのか」（主催・関西こども文化協会）を開催、会場満杯の160名が参加しました。

推定100万人以上といわれる引きこもりは、その半数以上が成人男子といわれ、新たな社会問題となっています。家族や若者のコミュニケーション、場所の喪失といった観点からも考えさせられるところは大きく私たちに大きな問いをつきつけてきます。

会場の大半は当事者の家族でしたが、9月の寺子屋トークでは、家族や教育の問題として取り上げる予定です。

■瀬戸内を走る。25霊場バスツアー



去る5月20日は恒例の法然上人25霊場巡拝バスツアー。今回は讃岐の法然寺さまを参拝しました。参加36名。同寺は、上人が晩年配流された由緒のあるお寺で、涅槃堂の寝釈迦像の迫力には一同びっくり。

また圧巻だったのは、瀬戸、鳴門、明石の瀬戸内海3大橋を一日で周遊できたこと。五月晴れに恵まれ、信仰と旅情の両方を満喫？　できた一日でした。

■都市公団で学んだこと

去る5月22日、都市公団の地域委員のひとりとして、阪神地区の震災復興事業プロジェクトを視察してきました。HAT神戸やアクタ西宮といった金のかかった巨大プロジェクトにはいささか食傷気味でしたが、高齢社会に対応したデイケアセンターやグループホームなど興味深いものでした。

視察のあと、10名の委員で意見交換会を。周囲を公団幹部が取り囲むというラウンド方式で緊張しましたが、これまたおもしろい経験でした。

これからのタウンマネジメントにいろいろ役立てせることができそうです。

■教化リサーチで「仏教と教育」

うちの出版社で編集を担当した「教化リサーチ」（佛教大学刊）が、このたび発行となりました。

「いのちの教育、現在形」と題して、仏教と教育についてのインタビューや寄稿で特集、東大の汐見稔幸さん、YWCAの金香百合さんの対談や、昨年10月に寺子屋トークとして開催した「もうひとつの学びの場を創る」の採録など、應典院の色合いの出た内容となっています。

非売品。希望者は應典院まで切手240円を同封の上、お申し込みください。

21世紀の宗教を考えるシンポ

去る4月23日に中之島・グランキューブにて「21世紀・日本の宗教を考える」（主催・新日本宗教団体連合会）が開催、言論界でも有名な解剖学者の養老孟司さん、作家の井沢元彦さんらとともに、既成仏教の側から発言者として参加しました。

宗教不信の時代にあって、宗教の役割と対応について語り合う趣旨でしたが、私は應典院の取り組みを中心にコミュニティ再生の場としての寺院の可能性について強調しました。

当日は教団関係者を中心に、大学の研究者やマスメディアの取材も多く、満場の500人で会場は埋まりました。

宗教の真価が問われる21世紀、イメージ先行の宗教論に惑わされず、確かな実践に基づいた宗教のありかたをもっと創造していくべきではないでしょうか。

